

宗祖 法然上人  
800回大遠忌

通信

法然上人と今、すべてのいのち

平成23年4月25日(月)～5月1日(日)  
総本山 永観堂禅林寺

# 「法然上人と今、すべてのいのち」……このテーマについて

平成二十三年に迎えます「宗祖法然上人800回大遠忌」は法然上人の御心を現代の人々にメッセージする契機であり、教宣活動の大いなる活力となります。また、この大遠忌を宗派一丸となつてとりくみ、意義深いものにしなければなりません。

そこで、この大遠忌を成功させるために「宗祖法然上人800回大遠忌」通信を発行することになりました。

その第二弾として去る四月二十二日永観堂図書館でお話されました北川隆法師の講演録をご紹介します。

「法然上人800年大遠忌準備委員会」で法然上人の御意志である他力本願の念仏の心を現代にどのように伝えればよいかという発想で、まずテーマが決まりました。

法然上人の生涯をたどり、「選択本願念仏集」から「一枚起請文」にいたるまでの、他力易行の念仏に集約されるまでの過程を議論しい「法然上人と今、すべてのいのち」というテーマに決まりました。

現在、「いのち」という言葉は、教育、社会、地域、司法の場でひんぱんに使われ、その使われ方は地についた使われ方をしています。わたくしたちが

「いのち」という場合は、教理にもとづき、体験をふまえ、智的に昇華させて「いのち」を受けとめたいかががでしょう。

**釈尊は「いのち」をどう考えたのでしょうか。**

釈尊が生まれたときに言ったといわれる「天上天下唯我独尊」これをどのように理解するか、あるいはどう受けとめるかということだと思います。

釈迦は、宇宙二元の原理の中で、自分という存在が、あるいは人間としてこの世に出現されたことが、固有な存在であり、それゆえに我一人が貴いと認識されたのではないかと、それが、いわゆる固有なるがゆえに自己を尊厳されたということではないか。

そして、出家の後、ガンジス川のほとり菩提樹下で初転法輪という形で悟りを開かれ、三法印とも四法印とも言われるなかに諸法無我を説かれた。この諸法無我というのは、やはり世界観であり、宇宙観であり、その宇宙や世界の中にあつて、人間の存在の原理をお考えになった。宇宙の中にあつて人間の存在とはいかなるものであろうか。諸法無我は宇宙自然のすべてのものが、共生しているという考え方、すなわち



## 北川隆法師

1931年京都に生まれる。

2001年大阪学院大学国際学部 定年退職

「法然上人800年大遠忌準備委員会」準備委員長として

遠忌事業計画のまとめ等委員会・議会において推進。

平成16年10月まで宗会議員参事会長

平成17年5月19日 宗祖法然上人八百回大遠忌 記念事業

事務局発足 宗機顧問として、総務担当顧問、宮部顧問

それは、生きとしいけるものがすべて  
のものが孤独な存在ではない。相互に  
依存していて、そこに初めて私がある  
という考え方です。

遺伝子が生の連続という形で連続と  
して途切れなくあつて、この二十一世  
紀にわたくしたちが両親から貴い命を  
貰っていたということと共通するもの  
であるとご理解いただいたら結構です。

続いてそれが釈尊の人間観あるいは  
生命観ではなかるうか。その人間観、  
生命観はいずれも宇宙の一原理として  
世界観や自然観をもとにしておられる。

そしてその中であつてこそ、わたく  
したちが初めてこの世に生まれでるこ  
とができ、この世に存在することが可  
能であるということの認識から出発さ  
れたのではなかるうか。それが初転法  
輪という理解でございます。

## 法然上人といのちについて

法然上人といのちのかかわり、仏  
道への旅立ちには、やはり父漆間時国の  
遺言でしょう。この遺言は重たいもの  
です。わずか八歳の子供ながら、その  
魂のなかにきちんと刻み込まれたに  
ちがいない。

この法然上人と父との死別、死別で  
あると同時に、死との出会いが父との  
共感にもなったことでしょう。

また、そういう機縁が発心になった。  
それと同時に魂に刻まれるような、勢  
至丸に対する遺言が、共感、アイデ  
ンティティとなり、法然上人の生涯の  
魂となり、心のエネルギーとなり、そ  
の魂のひびきが他力本願易行の念仏の  
底流になったのではないのでしょうか。  
すなわち、死にいたるような怪我を負  
いながら、手の施しようもなく、頼る  
医者もなければ、薬もない手立てもな  
いなかで、死にいたる過程と遺言とい  
うこの二つの共感が法然上人の思想的  
な発達のベースとなり、他力易行念仏  
の教えというものを立教開宗という形  
にもつていかれる「選択本願念仏集」に  
至るまでの底流に、この法然上人の発  
心と仏道という点で、父の遺言と死と  
の出会いがあるのではないのでしょうか。  
また、「お念仏といのち」の結合となる  
のではないのでしょうか。

## 専修念仏への道

つぎに法然上人の仏道。法然上人は  
九歳のとき、叔父さん観覺の弟子とな  
つて得度され出家されました。その後  
の経過についてはみなさん御承知なの  
で省略させていただきます。

比叡山における山家学生式にもとづ  
く仏道修行と学問。これが、後の法然  
上人の大きな基礎となったと思います。

その後法然上人が遭遇された出会いの  
なかで、大きな役割を果たしたのでは  
ないのでしょうか。たとえば、住蓮・安  
樂の事件で四国へ配流されることがあ  
つても、南都仏教に会われても、いろ  
いろな困難からの脱却に、基本的な修  
行があつたからこそではなかるうかと、  
また、善導大師の「四帖疏」との出会い  
にしても、それを読み取る力、それを  
理解する力、それを自分のものにして、  
自分の言葉にする力、それは、やはり  
比叡山における基礎的な学問の習熟が  
あつたからこそではなかるうかと思  
います。

## 法然上人の「二種深信」

つぎに法然上人の自己内省と自己の絶  
対的価値の否定からの出発があります。  
愚鈍、愚痴の法然という言葉がのこさ  
れていきます。

「選択本願念仏集」の第八巻の三心章  
のなかで、二種の深心がのべられてい  
ます。「自身は現にこれ罪悪生死の凡  
夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流  
転して、出離の縁あることなし」と、こ  
れが自己内省の基本的なものではな  
かつたか。法然上人はいままで、比叡山に  
登られ、西塔黒谷の叡空上人に会われ、  
天台を学ばれ、あるいは南都の諸宗を  
歴訪され、その結果、それにもかかわ

らず、己の仏道への満足感が得られな  
いなかで、善導大師の「四帖疏」に出  
会い、今こそ自分が立つと決心された。  
今末法の世に、自身は現にこれ罪悪  
生死の凡夫と自己の価値の絶対否定か  
ら、自分はそのような阿弥陀様に救わ  
れるような価値はないんだ、ただ仏の  
本願におすがりするしかない私、無力  
の私、そんな無力の私を救ってください  
る阿弥陀仏の四十八願……「仏願力」を  
自分の教義と仏様の本願とをすりあわ  
せて一体とされて、ここから大本願、報  
恩感謝のお念仏がでてきたと思います。  
そしてこの教えを当今は末法の世に  
伝えなければという強い信念と意気込み  
がこの二種深信のなかに感じられます。

最後に、この一紙に至極せりという  
「一枚起請文」こそが法然上人がわれ  
われに残された御遺言ではないでしょ  
うか。  
「ただ往生極楽のためには、……」とい  
う往生(生れ往く)のなかに「いのち」の  
息吹きをふきこまれたのではないだろ  
うか。やはり、もう一度、法然上人が  
どのようなプロセスを経て、この一枚  
起請文にいたられたかということ理  
解し、認識したうえで、「法然上人と  
今、すべてのいのち」を考えてみては  
いかでしょうか。

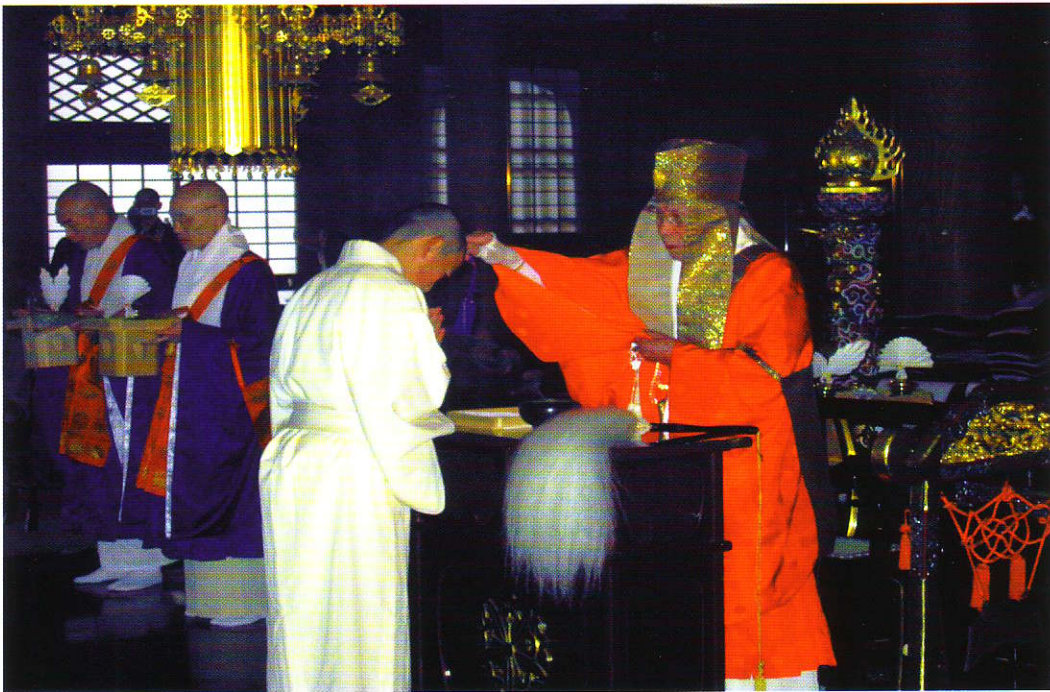
新発意の誕生

集団得度式挙行

去る三月二十七日(日) 総本山  
禅林寺において、宗祖法然上人八  
百回大遠忌記念事業のひとつであ  
る集団得度式が執り行われた。

当日は遠くは北海道から、男性  
九名、女性五名の十四名が参加し  
ました。緊張の面持ちで得度式に  
のぞんだ受者たちは一人ひとり剃  
髪をうけ、ご法主の涙ながらのお  
言葉に感動した様子でした。

二十一世紀の禅林寺派を担う僧  
侶として大きく羽ばたいて欲しい  
と参加者一同そう願うものでした。



曼荼羅相承会 開筵

この度 宗祖法然上人八百回大遠忌記念事業の一つ  
として、総本山禅林寺において曼荼羅相承が執り行わ  
れます。

この相承は法脈相承(加行)に並ぶ、いやそれ以上の重  
みのある相伝です。注記に曰く「……器量の人たりと  
雖も起請文をもってこれを許すべしと……」

当派では平成六年、西山国師七百五十年遠忌記念に  
修行されて以来の相承です。

是非、如法に受伝されることをお勧めいたします。

記

- 一、日時 平成十八年五月三日(水)～七日(日)の五日間
- 一、会場 総本山禅林寺
- 一、伝燈大導師 総本山禅林寺第八十九世  
法主 小木曾善龍院下
- 助講 已講 竹村賢明師
- 一、受伝資格 宗制第二八八条による

詳細は決まり次第、禅林に掲載いたします。

\*宗祖法然上人八百回大遠忌記念事業事務局では、  
遠忌各部署の事業計画が出来次第、大遠忌通信と  
して、定期的に情報を提供することになりました。

発行所 宗祖法然上人八百回大遠忌

記念事業事務局

〒六〇六-八四四五 京都市左京区永観堂町四八

電話 〇七五-七六一-〇〇〇七

FAX 〇七五-七七-四二四三